

アメリカにおける銀行数減少・店舗数増加の地理的分布

大阪市立大学 数阪孝志

本報告は、金融再編が進むアメリカの銀行組織構造の特徴を、FDIC（連邦預金保険公社）が公表している州別の銀行関連統計に依拠し、銀行数・店舗数の増減に関する地理的分布の視角から明らかにするものである。

1985年末以降2000年末までの15年間にアメリカでは商業銀行数が42.3%減少する一方で、支店数は48.0%の増加を示した。しなしながら、これらの増減はアメリカ国内で一様に生じたのではなく、地域別にみると増減のペースは異なり、それは各地域のもともとの銀行組織構造や経営状態に関連することがわかる。中東部、中部、中西部、南部地域は、銀行数増加要因としての新規参入が比較的弱く、銀行数減少要因としての戦略的合併が進展した結果、銀行数減少の程度が高い地域となった。それに対し、東部、南東部、西部地域は、新規参入が旺盛に展開され、戦略的合併も盛んに行われたが、結果として銀行数減少の程度が低くなっている。

支店数増加でみると、中部、中西部、南部地域は支店数増加率がきわめて高く、東部、西部地域では増加率が低いが、これは銀行組織が単店銀行中心の組織スタイルを多くとっていたか、あるいははじめから多店舗展開の銀行組織スタイルであったかという事情に深く関連している。

最近15年間の金融再編は、中部、中東部、中西部、南部では小規模な単店銀行が数多く消失し、本格的な地域戦略での競争を意識したものとなっている。それに対し、東部、西部、東南部では、強い新規参入行動と戦略的合併によって積極的な再編が進展し、その結果銀行数の純増や支店数の純減となっている州があるなど、多様性を含んだ再編の形を示している。